

---

# とあるもしもの座標移動《ムーブポイント》

うちはマダラ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とあるもしもの座標<sup>マーフボイント</sup>移動

### 【Zマーク】

Z4531Y

### 【作者名】

つばはマダラ

### 【あらすじ】

結標さんに憑依した人のお話です。

結標さんが

かなりチート化したり原作のストーリーが変わったりしてます。ご注意ください。

## 憑依したのは座標移動

みなさんほ、もし禁書の世界のキャラに憑依出来るとしたらどうのキャラを選ぶ？

私だつたら右方のフィアンスマとか一方通行辺りに憑依したいと思う。だつて無双したいもん。

ああ、垣根や軍霸辺りもいいかも。アイツ等無限の可能性があるイメージあるし。

「……結標淡希。<sup>むすじめあわき</sup> という事は能力は座標移動か。<sup>ムーブポイント</sup> ……微妙」

鏡に映る長い赤毛をお下げ髪のよう耳より低い位置で左右に結つて、背中の方へ流していいる女の子を見てそう確信した。

しかし、服装は原作の痴女みたいなサラシニースカでは無く、普通の白い半袖のカッターシャツにプリーツスカートという極普通の服装だつた。

……だが、これどこの制服？ 原作の結標が所属する霧ヶ丘の制服ではないが……もしかしたら中学生時代の結標なのだろうか。

まあそれはともかく。

座標移動、か。弱い能力では無いと思うのだが、なんだかなあ。

上手く使えばかり強力な能力だが、如何せん一方通行や未元物質みたいな派手さはないし、正面突破じやおらあああ！！ があまり出来そうにない能力なんだよね。

しかし……無能力者とかに憑依しちゃうより遙かにましか。いや、上条さんは例外だけね。

「とりあえず能力使ってみますか」

私は鏡から一メートル程離れた位置に落ちて いる学生鞄に目を向ける。

手のひらを広げ、鞄を掴む用意をする。

「来い、鞄！」

無音で鞄が私の顔の前十センチ前くらいに空間移動してきた。テレポート

「うおつと！」

落ちてくる鞄を慌てて両手でキャッチする。

どうやらまだ座標の指定が甘いようだ。

まだ中学生の頃の結構だし、演算能力が足りないのかな。それにして、部屋の中だけでは情報量が少なすぎる。

「外に出てみるか」

学生寮を出ると、通りにちらほら私と同じ制服を来て いる人達が歩いているのが確認出来た。

飾りつ 気の無い黒い折り畳み式の携帯で時刻を確認してみると、7：58と表示されている。成る程、今は登校時間のようだ。学校までどれくらいの距離があるか知らないけど。

とりあえず登校して いる子達に着いていく。

「あいたつ！」

「いよう、優等生！」

突然誰かに背中を思い切り叩かれたようだ。  
かなりイラつとした私はソイツを思い切り睨み付ける。

「こつもは二十分前には学校に来てるのに今日は遅い。……あれ、何で怒ってるの？」

茶髪でややシンシンヘアの男の子はばかりを見てキョトンとした顔をしていた。

「うん、誰だコイツ？」

## 憑依したのは座標移動（後書き）

ちょいと女が主人公の小説も書きたくなつたので書いてみました。  
あと、チート結標さんも書きたいといつのもあります

## 今の周囲の状況を簡単に把握しました

とりあえず今確認出来て いる事を述べよ。

まず、私が通う中学は朝陽南中学あさひみなみといつ第七学区といつ特殊な能力を開発する事に念を置いて いる学校らしい。

将来進学するであろう霧ヶ峰きりがみに似たようなところがあるな。 あそこも特殊な能力を開発させる学校だつたハズ。

次に私の能力の強度は大能力者《レベル4》だ。 これはクラスメイトから教えてもらつた。

という事は今の時点で自身をテレポさせる事も可能っぽいね。 帰宅する時やつてみようかな。

今日学校行つて分かつた主な事はこれくらいか。

……あ、今朝に私に無礼な挨拶をかましやがつた男の名は霧ヶ峰きりがみ優ゆうといひらしい。

原作にもアニメにもこんな奴はいなかつた。 まあ原作にもアニメにも出てないだけで結標淡希と交流がある奴は結構いるだろ。

今はもう全ての授業終わつてホームルームに担任の教師が来るのを待つて いるが、 霧ヶ峰は周りのクラスメイトとはしゃいでいる。 「マイシはどうやらクラスのムードメイカーミたいな存在らしい。

それにしても常盤台中学とかに通いたかつたなあ。

あ、 でも美琴や黒子が入学する前に卒業しちやうね。 けど、 心理掌握ルアーウィンの食蜂さんにはギリギリ会えるな。

ん、先生が来たようだ。

「やあ。結標君」

ホームルームが終わり、放課後イベントも特に起こりず、校門を出た所で白衣を着た男に声をかけられた。

学園都市で白衣とか研究者以外に考えられないな。

「明日は身体検査の日だ。システムスキャン悪いけど能力の精度を確かめるために研究所に来てもらうよ」

身体検査が明日あるのは知っていたが、私こと結標淡希がどこかの研究所に所属していたってのは知らなかつたな。

まあ座標移動ってただでさえ珍しい空間移動系列の中でも貴重な存在らしいから、専門の研究所があつてもおかしくはない。

「ああ。そうだつたわね。研究所へは徒步で移動出来るの？」

どうでも良い事だが私は会話する時は原作の結標と同じ口調で話す事を心掛けている。

特に意味は無い。ただ、演じるのがなんとなく楽しいだけ。

「結標君、今日は体調がよろしく無いのかい？　君の能力で研究所まで行くに決まってるだろ」

研究者っぽい男は怪訝な顔をしながら遠くに浮かんでいる赤いバルーンを指差す。

「えつ」

「さあ研究所の目印のバルーンまで僕と君自身を座標移動で移動しよう……どうした？　まさか本当に具合悪い？」

「いや、大丈夫よ。あはは」

多分これつて能力を使いこなす練習か何かだよね。

私を送迎のパシリに使うためじゃないよね？

……ま、いいか。どうせ帰宅する時に能力使うって決めてたしね。

「行くわよ

研究者の男に肩に手を置く。

通行中の人に間に間違えて転移したりするとおぞましいオブジエ<sup>ト</sup>が出来ちゃうから、まずは障害物が少ない上空にテレポするかね。真上に障害物は無し、よし、まずは上空八十メートルくらいに座標移動 ！

「お、おおおつ」

すげー！ あつさうとテレポできちゃったよ。

見ろ！ 人間がゴミのようだ！ ……うわつ、研究者の男がこつち不審な目で見てるよ。

これ以上変な目を向けられないためにもさつさと研究所まで行くか。

お次は前方へまた八十メートル ！

（よしよし）

先程よりバルーンが大きく見えるって事は今度も成功したって事だ。

座標移動を繰り返している内にバルーンの目の前くらいまで移動出来たので、次に地面の三十センチくらい上に転移する。誤つて地面に足埋めるわけにはいかないからね。

「お疲れ様。いつもより精度とか能力を使う間隔が短くなっているんじやないか？」

「あら、そうかしら」

「君は自分の能力を恐れている縁があつたからな……少しはそれが薄ってきたのかな？」

「…………」

うーむ。原作の結標はそうだったかもしれないが、私は結標であつて結標でない人物みたいな人間だからなあ。

ぶっちゃけ能力なんて私はただの便利な道具としか思つてない。

「いけない事聞いたかな?」

「別に。気にしなくていいわ」

「そうかい。じゃあ行こうか、主任のとこへ」

主任か。座標移動開発の主任の事なんだろうが、変な人物だったら嫌ですねー。

つうか、今気付いたがこの研究所は建物は平凡だが敷地はかなり広いな。

なんか期待されてるみたいでプレッシャーががが。

「行こうか」

研究者の男は先導して研究所内に入つていった。私はいつの間にか口の中に溜まっていた唾を飲み込み、彼の後に続いた。

今の周囲の状況を簡単に把握しました（後書き）

主人公は結構お気楽な人だから結構メンタル強いです

## 主任に会いました

中に入つてみるとロビーらしき空間が私を迎えていた。観葉植物や長椅子とかが置いてあるスタンダードな感じだ。

「ちょっと待つてくれ。今から主任の神山 かみやま さんに連絡つけるから」

研究者の男は白衣のポケットから携帯を取り出し、電話先の相手と何やらやつとつを始めた。

「神山主任、結標淡希が到着しました。……え？ まだ狩りが終わってない？ いや何ゲームなんかやつちやてるんですかアンタ」

おいおいなんか不安になつてきたんですけど。頼む！ 変な奴はお断りだ！

「今日は帰つて貰えつて、いくらなんでも理不尽すぎるでしょうが！ 呼び出したのはアンタだろ！ てか、結標君のメンタル面に問題がるのつて絶対アンタの性格せいでしょう！ ……あ

「うちみんな。

まあ、さつさと先に進めてほし―から愛想笑いして手振つとくか。失言は誰でもしちゃう事だ。

「え？ お前がつるさいからクエストに失敗した？ 知るかッ！ ！  
あれ、切れた」

あーあ、今思えば学園都市の優秀な研究者は木イイイ原クウウウンみたいに変人が多いのかな。

今さつきの会話だけで変人フラグがビンビンだよ。もう、ここは腹を決めるぞ。

「ん？ エレベーターが動いてる？ なんだ結局來るのかツンデレさんめ～」

研究者の微妙にキモい発言の通り、チーンというエレベーターが各階で止まる時のお馴染みの音がロビーに響いた。てか、今気づいたよエレベーターがあつたなんて。

あと、何でもかんでもツンデレにしちゃうのは良くないと思つよ研究者さん。

「光山ああああ！」

「びぶるぢつ！？」

今起きた事を説明しよう。エレベーターから飛び出してきた金髪ポニテの白衣着た女の人が研究者光山君を蹴り飛ばして、その勢いで飛んだ光山君が観葉植物の鉢植えに頭だけ埋まった。

それにしても原作SS2のモツ鍋さんみたいな断末魔だったな：

…」冥福をお祈りするよ光山君。

「よー、久しぶり淡希」

「ひ、久しぶりね」

お、おお。何か思つたよりフレンドリーで悪くなさそうな人だ。それに美人巨乳だな。胸元が大きく開いた白衣から見える谷間がエロいぜ。

けど、あんまりこっちをジロジロ見るのはやめてほしいな。

「淡希……お前……！」

「どうかしたの！？」

「前来た時よりおっぱい大きくなつてない！？」

「ズゴー——ツー！」

「この人が男だつたら確實に壁に埋めてたぞ。ああ、女でも黒子みたいなガチレズだつたら埋めるけどね。」

「いきなり何よ……」

「ふふ、『冗談だ。さて、早速だが実験を行おうか』

「どこで」

「外で」

妙に外の敷地広いと思つたらやつぱりか。

神山に案内されて着いたのは学校にある運動場のような広い場所だつた。

完全に殺風景な場所ではなく、アルファベットが書かれた「コンテナがいくつか積み上げて並べてあつたりする。あと何か建設に使つような重機も何台か置いてある。

「さて、まずは飛距離の検査から行おつか」

「何を飛ばせばいいの？」

「光山」

「！？」

「とこいのは『冗談であそこにあるアレをまず飛ばしてもらおうか

良かつた。もつ少しで『もつやめて』とか言いそつになつたわ。

アレつて……ああ、あの橢円形の形した鉄の塊みたいなヤツか。

確かアニメで黒子がああいつの飛ばしてたよな。  
とりあえずこいつに引き寄せと。

「あ、ちょっと待った」

「まだどうでもいい事言つもりりじゃないでしょうね」

「お前確かに自分の能力の精度を少しでも上げたいとか言つてたわよね？」

「そりやあ精度が高いに越した事はないわね」

「お前の座標移動は普通の空間移動と違つて始点と終点が固定されない自由度が高い能力だ。そこだ」

背中に手を回して神山は何かを取り出した。  
お、この黒い棒みたいなのはもしや……！

「これは……」

「警棒兼用の軍用懐中電灯だ」

「この光で能力使用時の基準をつけろといつ事ね」

「おっ、察しがいいなさすがお前だ」

早速、懐中電灯の光を鉄の塊に当ててみると、成る程、これはいい。光が当たつている物体だけを転移すると考えれば余計な演算は必要無くなる。

朝方の違和感があつたのはこの懐中電灯という粗棒が無かつたからか。早速、足元に鉄の塊をアポートつと。

「どんな感じよ

「いい感じね。余計な演算の必要が無くなつたわ」

「ふつ、それは良かつた。じゃあ早速飛距離の検査を始めるが準備はいいか？」

「バツチリよ

「今までの記録はその自重九十キロのソイツを五百メートルちょいだ。それじゃあ検討を祈る」

ちょい『・・・』つておい。アバウトだなー。いや、このアバウトさはひょっとしてメンタル的に弱い結標を『遣い』とかだつたりするのだろうか。

まあいいや。とつあえずこの広場の奥にまで飛ばすつもりでやってやう。

ツ！

『飛距離、千一百メートル』

「なつ！？」

「うえつ！？」

地面に幾つも設置されていた機材の音声を聞いて、思わず変な声出してしまつた。

せ、千メートル越え！？ え、原作の結標淡希さんの最高飛距離を中一の時点で上回っちゃつたよ！？

何これ憑依補正なの？ 転生オリ主がよく最強だったりするあれに近いものなのかなー？ ……いや、少し大袈裟か。

「お、おま……淡希。一週間の内に何があった！？」

ひつちが聞きたいです。

主任に会いました（後書き）

さあ 結標淡希ん第一段階の強化が始まりました。

## 身体検査の結果は……

「た、多分貴方がこの懐中電灯をくれたお陰じゃないかしら  
「そんな……魔法のステッキを渡したんじゃないんだぞ。いきなり  
「こんな……」

「まぐれかもしないからもう一度やってみるか?  
近くにある分銅もどきを一度こじひらに寄せて、もう一回　！」

『千三百メートル』

「まぐれどころか記録伸びちゃったー！」

「偶然の成果でも無いみたいだしなあ。お前、明日の身体検査で超  
能力者《レベル5》認定されるかもな」

「へー」

「意外とそつけない反応なのなお前。空間移動系初の超能力者だぞ  
？」

結構つて最高飛距離が八百メートルくらいで転移できるのは自重  
4・5トンくらいまでの物体だったよな。それで自身をテレポ出来  
ないから大能力者《レベル4》止まりで超能力者認定されてるんだ  
つけか。

だから今の時点で超能力者判定されるのは当然、そう当然。  
と、思つたけどまだ飛ばせる重量の限界を測つてないや。

「次は転移出来る重さも測るか。……前の記録は五百キロちょい超  
えだつたかな」

「また数値がアバウトすぎる」

「気にしてるな。ミコグラムとかまで測つたら鬱陶しいだろ、お前への気遣いだ」

自分で言つあやつとただの面倒臭がりに見えりやつよ神山さん。

「向こうにコントナがあるだろ?」

「ええ」

「あれを飛ばしてもうおつと黙つてるんだが……」

「重さはどれくらいあるの?」

「一つで約一千キロだ」

「一きなり凄くハードル上げたわね」

「いや何か今のお前だつたら出来そうな気がしたんだがな……無理か?」

確かに飛ばせる距離は明らかに上がつてゐる。といつ事は演算能力  
上がつてゐる事だよね私。

正直……やれそうだ。

むしろ今なら出来ない気がしない。

というか原作の結構の記録は四千五百キロくらい……今の私なら  
これ上回れるんぢやないか? エーと何か手頃な物はないかな。コ  
ンテナを同時にいくつも飛ばすのはかなり大変な気がするのよね。

「あれつてどれくらいの重さがあるの?」

私が指差したのはキャタピラ式の巨大なトラクターだ。恐らく建  
設用か何か用だろ? なんかアタッチメントつけられそうな部位あ  
るし。

「七トンか八トンぐらいだつた筈だが。つてまさかお前!?」

「ええ、そのままがよ」

「……まあいい。やつてみる」

よーしまず懐中電灯で標準つけてと。後は始点と終点を決めて演算する。

始点はあのトラクター、終点は私の十メートル前でいいだらう。よし、やれる！

「凄い……」

無事に、トラクターは指定した位置に移動した。

神山の驚く声が心地良いな……ツ！？

「淡希、おいでじた淡希！？」

身体中を突然襲つてきた違和感に耐えきれずに気付けば私は両手と両膝を地面に着けてしまっていた。

何だこれ三半規管が狂つたみたいに頭がくらくらする。しかもこめかみ辺りの血管が収縮する感じもするし、身体中から脂汗が吹き出でくる。

体に負担がかかっているのか……？　ああ、そういうえば過度な演算をすればそうなるんだっけか。

「大丈夫か？」

神山が私の背中を擦りながら心配そうに此方を覗き込んでくれている。

とりあえず作り笑いを神山に向けて、立ち上がる。膝はまだ震えるがすんなり立ち上がれた。

一時的に体調がかなり悪くなるだけで、ヤバい後遺症とかが残るわけではなさそうだ。疲労はかなり溜まつたが。

そつだよ思い出した。原作では結標は千キロ以上の物レポしたら体調不良起こすんだつた。  
調子に乗りすぎちゃつたな。

「おい、歩けるのか？」

「大丈夫。一瞬だけ体調悪くなつただけだから」「すまんな。私が止めれば良かつたのにな」

「いや、私が調子に乗りすぎたのが悪かつたわ」

うわ、なんか暗い空気になつてきた。この人意外と真面目なのな。

「……明日は身体検査だから今日はもつ帰れ。家で体を休ませておけ」

「分かつたわ。今日は世話になつたわね」

「ああ、待て」

「何か？」

「そのまま帰れとか酷だろ。私が車出すからそれに乗つて帰れ」

やだ……この人優しい……

「結標さーん！」

私の元に一人の女の子が走りよつてきた。

黒髪をポニーテにした白木結さんと茶髪ショートカットの神木絵里

昨日帰つてすぐにダウンしたが、今日は特に体調不良が無いな。  
今は身体検査受けるために学校運動場で順番待ちしているとこだ。  
この学校の身体検査は番号順に行つらじい。

さんだ。一人とも昨日、友好的に私に接してくれた人物である。

「そろそろ結標さんの身体検査が始まるんでしょう？ 私、自分の身体検査終わった後ダッシュで来ちゃったよ」

「白木さん、結標さんの番号は1108番だからまだ十分くらい時間あるよ？」

「特等席確保のためよ。結標さんが身体検査する時つていつも人混み出来るじゃん」

「え、それ初耳なんですけど。

まあいいやギャラリーごとに屈する必要はない。

「二人とも身体検査の結果はどうだったの？」

「あたしは安定の大能力者判定でしたよー」

「私もいつも通り強能力者《レベル3》判定でした」

白木さんが<sup>ファイヤーレイン</sup>発火豪雨で神木さんが<sup>メンタルアジャスト</sup>心理調整だつたか。

実は知つてるのは名前だけでどんな能力なのかは私は知らない。私は憑依される前の結標なら知つてたかもしれないけど。

「あーあ。今度こそ超能力者判定受けると思つてたんだけどなー」「それは絶対にないですよ」

「何い！？」

「この学校で超能力者判定受けそうな人つて霧ヶ峰君が結標さんくらいだと思いますよ」

「ぐう……でも、結標さんは超能力者になれるかもとして霧ヶ峰はなんかムカつく」

霧ヶ峰……あのムードメーカーってそんなに能力凄いのか。気になるな、霧ヶ峰の能力のみ、気になるな。

「次、110番。結標淡希」

「ざわ……ざわ……。」

今、私の後ろには千人くらいのギャラリーが立っています。やば  
ば、少し緊張してきた。

「あ、そうだ。」

「すみません」

「何だ？」

「小道具つて使用可ですか？」

「小道具とは？」

木陰にそっと置いていた懐中電灯をアパートさせ、検査官に  
見せる。

「ああ、これくらいなら許可しよう」

「ありがとうございます」

「始めるぞ、配置につな」

白線のラインまで歩き、とりあえず深呼吸する。

いかんいかん緊張しては駄目だ。別に超能力者判定受けないと死  
ぬってわけじゃないんだから落ち着こつぜ私。

「まず、自身の転移を行ってくれ」

自分の転移だと……昨日まともな練習していないぞ。

座標移動つて自分飛ばす時、普通の空間移動と違つて自分を基準

に演算するんじゃなくて、始点と終点の演算しなきゃいけないから演算負荷が高いんだよな。

まあ、仮に埋まつてももう一度テレポすれば皮すり剥け回避できるからとつあえず覚悟決めて運動場の端田指して飛ぶか。

懐中電灯マジック！

『飛距離記録 千一百一十五メートル』

ふつ、ざつとこんなもんよ。

私がもう一度テレポして定位置に戻るとギャラリーから歓声が巻き起じつた。

ふふふ、ドヤ顔しちゃこいつになるなこわは。

「お、おい、お前懐中電灯に細工とかしてるんじゃないだろつな？」  
あ、後で調べさせてもらひうぞ」

「好きにじうぞ」

「……つ、次は自分以外の物体の飛距離を測るぞ」

よつしゃなんか自信ついてきた。どんどん来いやあ！

『自身飛距離	千一百一十五メートル
物体飛距離	千三百五十五メートル
最大重量	五千六百キロ
総合評価	LEVEL 5

身体検査の結果。

『ご覧の通り私、超能力者になつちゃいました。』

## 身体検査の結果は……（後書き）

身体検査での最大重量が減ったのは主人公が体調悪くするのを恐れて少し自重したからです。

さて、次回から戦闘ストーリーや原作キャラ達を出す予定です。

## 【主人公の現在スペック】

【名前と年齢】……結標淡希（14）

【性格】……原作の結標よりも演算力高い、あと少しお気楽な性格。だが人前ではクールぶる。

殺しはあまりしたくないが必要ならばやる予定。

え？ ショタコンかどうか？ 知らんがな。先で分かるんじゃないんですか？

【能力】……座標移動のレベル5。

最大重量は実は10トンまでいける。だが、1トンあたりから体に負担がかかりてしまう。

最大飛距離は1300メートルちょいくらい。

懷中電灯無しだと精度が悪くなり、飛距離も重量も低下する。

飛ばせる物体はあくまで固体か液体のみ。

自身の転移は楽々とこなす。

## 【主人公の現在スペック】（後書き）

まだまだ結構はパワーアップします

したらこうこう風に書きます

レベル5になつてからとこつもの……ん？ あの白い人物は……！？

超能力者判定されてから一ヶ月が経ち、結構私の生活は変わつてしまつた。

まず、かなりの金持ちになつた。

奨学金も大能力者時代の奨学金明細書と現在の明細書を比べて三倍以上になつてたし、超能力者判定祝いとして上層部の誰かさんから口座に五千円も振り込まれていた。何これ怖い。

あと私の所属していた研究所が多くの人員や設備が送られてきて一気に騒がしくなつた事か。

……これまで嬉しい変化なんだけどね。

「テメエが第八位だな」

「ちょっと俺らと話していかない？」

こんな変化も起つてしまつたわけだ。

最終下校時刻過ぎやちょっと人通りの少ない場所を歩いてるだけで頻繁にこういう馬鹿達に絡まれるようになつた。

恐らく私が序列八位という超能力者の中で一番低いところに属しているから集団なら勝てる勘違いしてるんだろうな。強さ＝序列と考えてるなど愚か愚か。

ああ、一方通行と垣根は別よ。

……しかし、コイツ等には削板軍霸さくばんぐんぱという禁書原作作者公認の序列七位のチート野郎の存在を教えてやりたくなる気分だ。

あーあ、夜中にコンビニ行くくらい普通にさせてくれよ……小腹が空いたんだよ……

「用件は？ 喧嘩を売るなんて用件だつたらお勧めはしないわ。怪

我なんてしたくないでしょ？」

「可愛い顔で凄まれても全然怖くないぜ～？」

「ハツ、」の人数を見てまだ余裕とはますますボコボコしたくなつてきちゃつたぜ」

「おいおい、あんまり傷付けるなよ？ 後で犯すんだからよ」

「その案にサンセー。俺に一番にやらせろよ」

ぶち殺すぞお前ら。

……ちょっと前だつたらこの状況に陥つてたら迷い無く逃げてた。しかし何度も何度も逃げている内に気付いた。キリが無い。だから最近は絡まれたらそれなりの制裁を加えるようにしている。いつも逃げて「八位は逃げてばかりいる腰抜け。雑魚決定」とかいうレッテル貼られます絡まるようになつたら困るしね。

手にある懐中電灯をぐるぐる回しながら私は考える。  
えーと。歩道を塞ぐぐらいの人数だが、ざつと見積もつて三十はいるな。どうやって料理しようかな。

スカートのポケットに入れてる高級コルク抜きをぶちこむ価値すらないよなコイツ等。コルク抜きが勿体ない。  
だからこれでいきますか ！

「ひつ！？」

「か、体がッ……！」

とりあえず懐中電灯の光が明確に当たる十人くらいを胸の深さまで地面に埋めてやつた。

「お、おい誰か引きずり出してくれえ！」

「やめた方がいいわよ」

「な、何で」

「地中と体が完全に密着してゐるに引きずり出したりなんかしたら皮がずる剥けになっちゃうよ？ 私がもう一度貴方を転移させるなら話は別だけど」

「じ、じやあ頼む……」

「嫌に決まつてゐでしょ」

「クソがあ！！ 調子に乗るんじやねえ！！」

後ろに控えていた無事な男達の内の一人が手のひらの上に炎を出現させていた。

発火能力か。恐るに足らない能力だな。

さて、今度はどう料理してやろうかな。近くにあるビルとかに転移させて建物の一部にでもしてやるか？

「邪魔だ。雑魚共オ」

！？

条件反射で耳を塞いでしまつよくな轟音が突然発生した。ついでに思わず両手で顔を庇つてしまつ。

私が目を開いた時に見えたのは目の前に積み重なるよつに倒れている男達と滅茶苦茶に破壊された歩道だつた。

「ンだア？ まだ生き残りがいやがつたか」

「の聞こ覚えある声と口調。

電灯に照らされますます白く見える髪と肌に爛々と光る瞳。

そして何よりこの破壊力抜群な能力……！ コイツは……コイツは……ッ！

「お、シカト」してンじやねエぞ」

いきなり一方通行アクセラレータきたあああああ！？ ヤバい超カツコいんですけどおお！？

多分、十三歳の一方通行さんカツケええ！ 一般人とはオーラが違うわやつぱ。

「わ、私はコイツ等に絡まれていただけよ」

「あン？ 何だ、いつもの俺に楯突いてくる馬鹿ジやねエのか」

ヤバい冷や汗が……生一方通行さんカツコいいけど、やっぱり怖いな。眼光がヤバい。

「つウかよオ、オマエ」

「ひつ！？」

「何で絡まれてたりしてたンだア？」

「多分だけど……私が最近超能力者判定されたからじゃないかしら」「あアハ位か。オマエ確か……座標移動つて能力だつたよな？」

「そうそう

「遠目から見てたが、何でこんな雑魚共の相手なンかしてンだア？ オマエの能力だつたら逃げる事も容易だよなア。ひょつとしてサドスティックな人だつたりするンですかア！？ ギヤハハツ！」

この人のツボが分からない。

ん、よく見ると「ヒー」が沢山入ったコンビニの袋持つてる。おつとそういう私の目的はコンビニに向かう事だつた。危うく忘れるところだつたぜ。

てか、普通に会話出来るのは思つてなかつた。まだ実験開始前だから大分性格が丸いのかな。

「逃げ続けてたらキリが無いと判断しただけよ。適度に制裁してたら絡んでくる輩の数が減るかなとか思つてるのでけど」

「なるほどね。いい判断だ

「そう?」

「オマエの場合はな

「え?」

「オマエ八位だろ? 絡んでる輩の思考は大体分かる。恐らく『序列が一番下の超能力者なら勝てる』とかだろ?」

その通りだけど一方通行の笑顔って何か怖いな。  
それにしても、とつきから私ビビりすぎかも。

「ズバリ、その通りよ

「まあさつきも言った通り、オマエの場合は適当に弾いてたら敵も減つていぐだろオナ。だが、俺の場合は違げエ」

「『学園都市最強』だから?」

「そオだ。学園都市都市最強の座を狙つ奴等はいつまでも蛆虫みてエに沸きやがる。ああいつクソ共は正直ビビりじよつもねエな」

「大変ね

「今ンとこは互いになア。……久々に長話してたら眠くなつちまつた。ンじやな

私の隣を通りすぎながら一方通行は暗闇へと歩いていった。

あー、少ししか話してないけど何か貴重な体験したような気がするわ。

一方通行の言つ事はマジであつてほしいな。正直な話、絡まれる度に相手ボコボコにするのを一年くらい繰り返してたら精神が病みそうだ。

そういう一方通行はこの後『無敵』を田舎す事になるんだよな……んん~、今日はもう色々と考えないよつこじよつ。コンビニだコンビニ。

「結標淡希が戦闘を終了。データは取りました。また、一方通行と接觸したが特に問題は無し」

『了解。引き続き監視し、データを取るよう』

レベル5になつてからといつもの……ん?

あの白い人物は……！？（後書き）

結構容赦がない結構さん。

今日はちょい原作ブレイクですかね。

## 友達とお買い物に行きます

いやあ 昨日は変な奴等には絡まれたけれど、一方通行に会えて話まで出来たし良い日だった。

今日は学校が休みだといつこことで白木さん達と遊ぶ約束してるんだよね。本日も良い日になつてくれる事を願おう。さて、そろそろ出るか。

あー。良い天氣。本日の待ち合わせ場所は Seven seventh m\_i st セブンスミスト という服屋である。

確か虚空爆破 グラビトン 事件が起こつた場所だよな。いや、起こつ「た」つて語弊があるな。これから二年後に起きた事件なのに。

そういうや、爆発から美琴達を守る上条さんとのシーンには思わずKAKKEEEEEEEEEEEEEEーーと叫んでしまった記憶があるなあ。

ていうか超電磁砲の上条さん格好良すぎなんだよ、うん。もちろん禁書でも相当カッコいいけど。

「あーーー！」  
「は？」

うわ、霧ヶ峰だ……

「コイツ、私が超能力者になつてからますますウザい絡みしてくるよになつたんだよな。

「俺は……俺は……まだお前に負けてなんかないんだからなーー！ 次の身体検査で必ず超能力者になつてやるー。覚悟しとけよーーー！」

言ひだけいつて走り去りやがつた。何なんだ本当に。

あと覚悟つて何を覚悟すればいいんだよ。はあ……朝から疲れる。

私が集合場所に到着した時には既に白木さんと神木さんは待つていた。

テレビ使ってきたんだけど二人共早いな。

「ごめんなさい。待たせちゃって」

「あはは、気にしないで。こっちが早く来すぎただけだから」

「一応、能力使って来たのだけれどね。前も待たせてしまった記憶が……」

「結構さん真面目すぎだよ～そんなの気にしなくていいって。それより……」

ズイツと身を乗り出して「あらをマジマジと見てくる白木さん。何か『デジヤヴ』のような。

「結構さんつてスタイルいいのにいつも露出少ない服ばっかで勿体無いよ！」

「えつ、どうしたのいきなり」

「何ですか、シャツに上着羽織つて下はスラックスつて！ この前も露出少ない服でしたよね！ くつそお！ 超能力者でスタイル抜群とか羨ましい～～！」

スタイルが良い、か自覚は無いが三年後には巨乳になる未来が待つてるのは知ってる。

んーと、この娘は体型にコンプレックスがあるのか？ でもスレンダーな体型で……ああ胸か。美琴さんを思い出すな。

……で、どうこう反応すればいいんだ私は。

「し、白木さん。結標さん困つてますよ？」

ナイス！  
ナイスフォローだよ神木さん。  
この娘マジ良い子だよ。

「はつ！ じ、じめん結標さん！」

別に氣にしてないわよ。お行先はどこか

三人まとめて座標移動つと  
！

「本当に便利な能力だよねー」

「結標せん、ありかどハ」「」指す」

「ハヤシで」

卷之三

## 突然の男の絶叫。

おこおこいの紅葉はまさか。

「ぬあああーー? 何なんですかこの販賣機は! 俺の五千円を返してーー!」

やつぱり上條なんだ――――――

何やら過去アソシチをガチヤガチヤしながら慌てふためいてる  
うわあ……確かに不幸だな。

「な、何あの人……」

「どうかしたの？」

「ちよば！？」「さん！？」

私が声を掛けると上条さんは少しひにくるりと顔だけを向けた。  
ほう、一方通行は整った顔立ちって感じだが、上条さんは男前だ  
な……現在涙目だが。

「」の自販機が俺の五千円札を上

## 「飲んじやつたわけ」

.....

上条さんから負のオーラが出始めちゃったよ。  
可哀想だから私の能力で取り返してあげるか。 対象は見えないけど、なんとかいけるか  
？

「はい」

ふう、無事に取れた。

「えつ？」

だから、どうぞ

「ふうのうわごと

「私の能力で取り返したのよ。触れずに対象を移動させる事が出来る空間移動の亞種みたいな能力と言えば分かるかしら？」

ガシイツ！ と上条さんが私の両肩を掴んできた。

え、ちゅ、おおか」なんに轟げれると。」

「あ、ああっー、『めんー、』

顔を赤らめながら上条さんは手を慌ててだけた。

今が原作の時系列だつたら押し倒されていたかもしけなかつたな。

危ない危ない。

「と、とにかくありがとー！ いつか必ず恩はせしめひからー！  
！ げつ！ もう一こんな時間かよ、お皿の特売が始まつちまつー、  
じやあまたなー！」

……あ、行つてしまつたよ。

というか名前すら聞かないでどうやつて恩返しするんだろー。  
それにしても、恩返しねえ。『貴方の髪の毛をツンツンモフモフ  
させてください』『だなんて口が裂けても言えないよな。

私はこの表面上のクールキャラをこれからも続けるつもりだから  
な。

「何だつたんだらうあの人、……」  
「嵐みたいな人でしたね」

後に世界を救う英雄だよ。

「よつし、絵里。あそこ行つ」  
「どつですか？ ええつー？ 下着コーナーじゃないですかー！」  
「結標さんはどつする？」  
「私は別に買つ下着は無いわね」

「私もありません！」

「そうですか。よし、絵里<sup>エリ</sup>行くよー！」

「何で、私は強制連行なんですか！」

神木さんグッドラック！

さて、私は適当に彷徨くか。

「結標淡希……今日は友人を連れているのか。やるなら今日だな」

白いパーカーを羽織った男は無線を取り出して耳に当てる。

「今から動くぞ。獵犬部隊B班を<sup>ハウンドドッグ</sup>『せせせせせせ』

『了解しました』

「いやー結標さんのおかげで沢山買つても苦労しないわ」

「今日は本当にありがとうございました」

「いいのよ。役に立つてこそその能力だし」

神木さん十袋分も買つとかばないわ。私なんか冬用にマフラーと手袋しか買ってないのに。

「それじゃあ今日はもう解散しますか

「二人共、家まで送るうか？」

「いえいえ！ そこまでしてもうつたら悪いです

「こんくら<sup>ク</sup>い余裕だよ

「そう？ じゃあ明日学校で会いましょう

正直神木さんは余裕に見えないが……本人達が遠慮してゐるならまあいいや。座標移動つと

やー。今日も良い一日にだつたわ。

暇だな、夕方のバラエティー番組でも……あれ、電話？  
神木さんからだ。どうしたのかな。

『結標淡希』

「ツー？」

男の声だと……？ 神木さんの父親か何かか？

『いいか。一度しか言わない』

『ていうか誰よ？』

『お前の友人達は預かつた。返してほしければ一人で第三蒸氣機関  
研究施設に來い。断れば友人達の命は保証できない。以上だ』

「……ち

く、くそッ！ 私が神木さん達を送つてれば……ツ！

おいおい、今日は良い一日になると思ってたのに。はあ……全く。

犯人の野郎……誰だか知らないが全裸で大通りに埋められる覚悟  
は出来てるよなあ！？

友達とお買い物に行きます（後書き）

今回は上條さんも出してみました。

閲覧、感想、お気に入り、評価等、超ありがとうございます！  
書く原動力になります！ と絹旗さんもいっています！  
超

私に果たし状？　いいぜ乗つてやるよ全裸にして繁華街に飛ばされる覚悟は当然

『第三蒸気機関研究施設』か。調べたところそれは第十九学区にあるらしい。

……白木さんも神木さんも優秀な能力者だ。という事はその二人を連れ去つた犯人はかなりのやり手だと想定できる。  
まあ一方通行みたいなどうしようもない能力でもない限り、なんとかできるだろ?とは思つ。

にしても私の休日を滅茶苦茶にしやがつて。私に恨みがあるのかは分からぬが、犯人の野郎……タダでは返さないぞ……

「ここが『第三蒸気機関研究施設』か。

ふーん。見たところもう使われてない施設みたいだ。中も広いみたいだし、いかにも戦闘をしやすそうな場所だな。

一人で来いとか明らかに罷フラグですよね。中に入る前に一応、自身を転移させる演算式を立てておくか。

「来たか……結標淡希」

「スクラップになる覚悟は出来てるかしら」

中に入ると白いフードを被つた男が五メートル先の地点で待ち構えていた。前髪が長く顔がはつきり見えない。

いきなり敵に遭遇するとはね……他に人間はいないようだな。周りにあるのはパイプとか大型の機械ばかりか。学園都市にしてはローテクな場所だよなあ十九学区つて。

ま、内装自体は広いみたいだし転移して埋まる心配はないな。私

はね。

「と、その前に私を人質を取つてまでして呼んだ意味は何?」

「答えると思うか」

「じゃあ人質の場所は?」

「愚問だな」

「交渉決裂つて事でいいの?」

「ああ」

私が懐中電灯を構えると同時に、相手の足元から一メートル程の渦潮らしきものが発生した。

なるほど、水流操作系の能力者か。白木さん達を捕らえるぐらいだから強度は高いんだろうがとりあえず

「いぐそ、レベルふ……あがつー?」

首まで埋まつてゐ。

ちよろすぎるだろ。

まさかこれで私に一騎討ちを挑もうとは……正直拍子抜けだ。つて、ヤダ!? これじゃあまるで私戦鬪狂みたいじゃないか。普通ここは問題があつさりと解決したつて事で喜ぶところだろつ!

「さあ、このまま頭に何かぶちこまれたくないなら答へなさい。まづ、白木さん達はどう?」

懐中電灯の光でフード男の頭に標準を定める。本気で頭にコルク抜きをぶちこむ気はないが脅しにはなるだろつ。

「俺を……」

「俺を？」

「甘く見るなよ……ツ……」

突然「ツーー」と男の周りが吹き飛ばされた。当然、地面も抉り飛ぶ。

私はとりあえず、破片が当たらないように一回後方へ三メートル座標移動する。

「俺を見ぐびるなよ」

もうもつと立ち籠める白い霧の中から白いフードの男は姿を表した。

水流操作で地中」と地面を吹き飛ばしたのか……中々のパワーだな。

しかし、地面に埋めても駄目なうすれればいいだけだ！

「があツーー？」

右肩にコルク抜きを転移してやつた。

馬鹿な奴だな……空間移動系が相手なりうついう攻撃が飛んでくるのは分かつてたろうに。

「もう一度聞くけど、白木さん達の場所はどこ？」

「…………

どうやら答える気はなさそうだな。

それにもしても、何が目的なんだコイツ。私に対抗する策も無いようだし、逃げる素振りも見せない。

不気味だ、さつやと口を割らせてやる。

次はコルク抜きを足に転移

！

「遅かつたな」

痛ツ！？

「え……？」

「何で。何でだ。  
何故私の腕にコルク抜きが刺さつてゐる……！？」

「遅れてすみませんでしたね」

「ツ！？」

「後ろに誰かいる！？」

振り向くと、眼鏡を掛けた不健康そうな黒髪の男が立つていた。  
まさか、コイツに十一次元座標の演算式が狂わされたのか……！？

「くそつ！」

「無駄ですよ」

コルク抜きをコイツの肩に　　！

演算式では相手の肩にコルク抜きを飛ばすように命令した……だ  
が、今度は私の脇腹にコルク抜きが転移された。

「か、かは……ツ？」

さつきのも激痛だつたが、今度のは耐え難い激痛だつた。

とてもじゃないが立つていられない……！ クソ、ここは無理矢  
理にでも座標移動を使って一旦脱出を……！

「少し眠つててください」

け、拳銃！？ これはマジでまか……い……

地面に横たわる結標が完全に意識を失つていることを確認した眼鏡の男は携帯電話を耳に当てる。

因みに、先程、結標に浴びせたのは寒弾ではなく極めて即効性の高い麻酔銃である。

「木原数多に取り次いでください。ターゲットを拘束した、と」

私に果たし状？ いいぜ乗つてやる全裸にして繁華街に飛ばされる覚悟は当然

結構痛みに弱い主人公。

一方通行「自分に絡む奴等から逃げるじゃなくて倒すといつ選択肢を選んだ時点でオマエは既に戦闘狂だろオガ  
結標「えー……」

## あまりレベル5をなめない方がいい

気付くとカプセル式のベッドみたいな物に寝かされていた。

おまけに頭には吸盤式のコードがいくつも取り付けられ、手や足は拘束具のような物でロックされてしまっている。

くつそー……助けに行く側が捕まるとは。しかも一方通行以外ならどうにもなる！ キリッ！ みたいな事考えておいて、名も知らないそこらの能力者に敗北してしまったよ。

あーあ、情けないつたらありやしないなもう。

「目が覚めましたか？」

突然、ぬつとこちらを誰かが覗き込んできた。

つて、コイツは私に拳銃撃つてきたあの眼鏡野郎じゃないか！  
キモい笑み浮かべやがって。

「おつと。能力を使うなんて馬鹿な事は考えてませんよね？ 僕がいる限り、あなたが能力を使用する事は自殺にしかなりませんからね」

やはりあの時私の能力の標準が狂つたのはコイツのせいか。

……ん、そういう腕や脇腹の痛みが大分、引いてるな。応急措置がしてあるのか。これなら演算をする障害にはならないな。  
後は能力使うのに邪魔なのはこの眼鏡男の存在か。  
そう思うとコイツの顔を見るだけで腹が立つてくるな……

不快になつてきたので、眼鏡男から顔を逸らし、目を動かして周辺を確認してみる。

すると、ここフロアを見渡すような一室が上の階にポツンと存

在しているのが確認できた。

そして、そこ窓ガラスから何者かがこちらを見ている。

短い金髪に顔の左側に入つた刺青。そして白衣の下に来ている初期一方通行のしましまシャツに良く似た服。

うん。どう見ても木イイイ原くウウウンだよなこの人。

ところで木原くんつておさんの割には中々カッコいいよな……

つて何を言つてるんだ私は。

この状況、どう見ても木原数多は私の敵だ。まず木原を倒す事を考えねば。

『田H覚めたかよ座標移動。無様な姿だなあ、お似合いだぜH?  
ギヤハハツ!』

最初の言葉が罵声とはさすが木原くん。

『おいおい起きたんなら何か恨み言の一つでも喋れよクソガキ。折角、そつちのマイクもオンしてやつてるのによ』

ああ、この声スピーカー越しの声か。

んじゃあ、木原くんのお言葉に甘えて恨み言ではないが質問するか。

「……まず、私をここに連れてきた理由を。そして白木さん達人質の居場所も教えてくれるかしら、あとここは何処かもね」  
『あ? 何偉そうに質問してんだ? 自分の立場分かつてんのかクソボケ』

えー……なんか怒られたんですけど。理不尽だ。  
てか、木原くん沸点低いなあ本当に。

『全くよオ危機管理能力つてのが無いのかよ。これだからクソガキは見ててムカつくんだよなあ……まあ、テメエをここに連れて来た理由ぐらいなら話してやる。一言でいつと『0次元の極点』だ』

はあ？ 何それ知らない。

禁書で次元に関する語句で知つてるのは空間移動に使う『十一次元座標』とキヤーリサ様が使つていた『全次元切断術式』ぐらいだ。

『0次元の極点』なんか知らないぞ。

あれか、私は禁書原作で読んだのは新約一巻までだからその先の巻に出てくる要素か？

『『0次元の極点』？ 聞いた事が無いわね』

「分かりやすくテメエに説明する。よおーく聞いとけよ？ まず、この世界において $n$ 次元の物体を切断すると、断面は $n-1$ 次元になる。三次元ならば一次元、二次元なら一次元。ならば一次元を切断するとどうなる？」

「0次元になるのかしら？」

『そうだ。まずこれが基礎理論だ』

結構適当に答えたが正解なのか。

それにして正直な感想、凄まじく机上論すぎると。そもそもどうやって一次元を切断するんだよって話だよ。

……え、まさかそれを私にやれって言つんじゃないだろうな！？

「まさか、私をここに連れてきた意味って」

『そオだよ、テメエの座標移動を使って一次元から0次元を取り出そうつてこつた。出来る確証は無いがなあ……クハハッ！』

ヤバいこのおっさん本気だぞ。

さすが一方通行というチート能力を開発しただけはある。考え方

が普通じゃないよ。

『空間移動系の能力者の中ではテメエがナンバーワンだろ？ そういう事だよ。本来なら第四位の麦野沈利の原子崩しが持つ、量子論を無視して電子を曖昧なまま操るという性質を利用して1次元を切斷してやろうと思つてたんだがなあ。あの女は暗部にいて拘束するのは色々と面倒なんだよ。だからまあ最初に原子崩しと同じ超能力者で空間移動系能力者のテメエで実験しようつて話だ。分かつてくれたかなあ！？』

ああ、とりあえず麦野さんに手を出さなかつたのは正解だと思つよ。

木原が操る獵犬部隊じや麦野に返り討ちにされたのが関の山だしね。

それはともかく、まだ色々と疑問がある。

「その『0次元の極点』つてのを手に入れられたとして、それで具体的に何が出来るの？」

『0次元と三次元の世界は対応しているが、三次元世界の広さに対して0次元は「一点」しかねえんだ。0次元の「一点」という『世界の全て』さえ手元にあれば、三次元の全ての座標とリンクが可能になる。ワープやテレポートの為の中継ポイントにできるつてわけだな。テメエが使つてる座標移動と違げえのは、その力は距離や重量に全く左右されないつて事だ。銀河の果てまで飛べる能力者など存在しねえが……この方式なら欲しい物、必要な物は銀河の果てからでも手元に引き寄せ、いらない物、嫌いな物は全部まとめて銀河の果てまで吹き飛ばすことが出来る……どうだ、素晴らしいとは思わねエか？』

なるほどね。本当に木原は他の研究者と比べて発想が飛んでるわ。

……ま、この理論が仮に確実な物としても人質を取つてまでこんな事をしようとしてる人物に協力する気は起きないな。

『話はこれで終わりだ。じゃあちやつちやつと実験装置になつてもらおうか座標移動』

「実験装置？」

『なあに簡単な話だ。これからお前の脳に細工して能力を使うだけの人形になつてもらおうってわけ。勿論、壊れるまで使ってやつから安心しろ』

清々しい程に外道つすね！！

あれ……ひょつとして私、人生積んだくな？

『あと三分で座標移動の脳を弄くる装置を起動させる。三澤、座標移動をお前の能力で押さえ付けておけ』

「了解」

手と足は動かせない。この状況を打破するには能力を使う以外に方法が無い。  
だが、能力を安全に使うにはこの三澤つて奴をどうにかしなければならない。

さて……本当にどうしよう？

三澤、コイツの能力が今、私が思い付いた能力だったとしたら。仕方無い、もう後には退けないんだ……ここはいつちょ賭けてみるか！

三澤腎。

彼の能力は座標異動（→ブクラッシュ）という空間移動系能力者相手にしか効果が無

いといふものである。

この能力は対象が組み立てた十一次元座標の演算式を読み取り、それを乗っ取つて相手を自滅させたりといった風に使用する。組み立てられた演算式そのものを利用するので相手は違和感に気付けないといふ空間移動系能力者にとつては鬼のよつたな能力である。

ただ、直ぐに使用出来るわけではなく、対象の演算式を記憶する時間を数分ほど要する。三澤は最初この能力を結標に對して使用する時、水流操作を使う白いフードの男に頼んで囮になつてもらつた。更に、「ロー」した演算式を使えるのは約五分であり、時間がすぎたらもう一度対象の演算式を記憶しなければならなくなる。

「 ！」

結標が能力を使用しようとしているのを感じした三澤は一瞬、驚いた表情を浮かべたがすぐにニヤリとした笑みを作る。

「馬鹿な人なんですね。いい加減に学習すれば良いものを ！」

三澤は結標に對して座標異動を使用する。

数秒だけ空間が歪んだ後、三澤はうつ伏せで床に勢い良く倒れた。

ふう。賭けに勝つたか。とりあえずこのカプセル式ベッドから脱出つと ！

まず、私は三澤の能力は私の組み立てた演算式を奪つて演算して此方を自滅させるといった能力だと予想した。だとしたら話は早い。

演算は相手が負担するのだから、体に深刻な負担がかかるほど  
重量を転移させる演算式を組み立てて、三澤を自滅させてやれば  
いればいいと考えたのだ。

もう本当に、かなり危険な掛けだつたな。

三澤の演算力が足りなくて物体の大量転移もキャンセルされたよ  
うで安心した。この建物には白木さん達がいる可能性が高いからね。

「恨まないでよね。ま、あまり超能力者をなめない方がいいって事  
上  
「

床に倒れて鼻血を出したままビクンビクンと痙攣している三澤に  
声をかける。

なんかヤバい後遺症とか残りそつだけじ、知つたこつちやないな。  
私は敵の心配をするほど優しくはない。

さて、後は木原をじうするかだな。

## あまりレベル5をなめない方がいい（後書き）

主人公は禁書のゲームの知識はないようです。

結標さんが自分の演算式が狂わされたとかいつてたのは彼女が他の空間移動系よりもかなり鋭かつたからです。

つまり、三澤くんにとつては予想外だったというわけですね。ドンマイw

あといつの間にかお気に入りが五百超えたりとかなり驚きました。  
読者の皆様ありがとうございます！！

## 安定の木原くん

あ…… さつきから何か足りないかと思つたら愛用の軍用懐中電灯が無いじゃないか。

恐らく第十九学区に置いてあるままか、コイツ等に回収されたかついでにコルク抜きも無い。

はあ、いざれにしても探してゐる暇は無いやうだ。無かつたら後で神山にまた調達してもらえばいいし。

とりあえずは ！

「木いいい原ぐううううん 」

木原に白木さん達を返してもらわないとね。

背を向けている木原の背後に座標移動すると、何かしらの「コンソール（多分、十中八九私が寝かされてたカプセルベッド式の装置のやつだらう）を弄つていた木原がこちらを面倒臭げにこちらに振り向いた。

「あ？ 何勝手にゲージから出でんだア、モルモットちゃん。さつさと定位置に戻れよ」

ええ！？ 何でこのおっさんこんなに余裕なの？ 昔は一方通行の顔を見る事さえビビッてたインテリちゃんだったんだよな…… 時の流れって不思議だなあ。

「三澤だっけ？ アイツはもう私が倒したわよ。だから能力を使うのにもう支障は出ない。貴方を地の底に埋める事も容易なのよ」「んな事あ知つてんよ。つたく折角雇つたのに本当に使えねえクズだなあアイツ」

「なら、今の状況は掘めてるんでしょ？ 白木さん達の居場所を教えてもらおうかしら」

「ハハハッ！ 急に強気になつたなあモルモットちゃんよお！ テメ亨こそ今の状況分かつてんのかあ！？」

と、木原の背後にいるモニターに映像が映し出された。その映像を見た瞬間、血の気が引いた。

「し、白木さん、神木さん……！」

モニターに写っていたのは紛れもなく白木さんと神木さんだった。手足を縛られ、口には猿轡 さるぐつわ を嵌められてグッタリと転がっている。

これだけでも結構ビビるが、一人は拳銃を突きつけられていた。この武装してる男達は服装からして猟犬部隊の隊員と思われる。

「お友達を助けたいなら大人しく実験装置になるこつたなア」「くつ……！」

「おつと、妙な動きはよした方がいいんじゃねえの？ こここのフロア全体の映像は全部向こうに行つてる。お友達の脳味噌をぶちまけたくないなら、さつさとゲージに戻る事をお勧めするぜえ？ モルモットちゃんよ！」

やつぱり木原くんだな。外道な上に抜かりが無い。

こここの映像を送つてゐる機器ぶつ壊しても、恐らく『向こうで木原に何かがあつた』と処理されて最悪の結果を招く可能性が大だな。実力行使が駄目なら……ここは話し合いで解決するしかないだろ。

「分かつた。けれど、一つこっちの条件を呑んでもらつてもいいかしら？」

「あ？」

「白木さん達を解放してくれないかしら？」

まあ、白木さん達が解放されたのが確認出来次第、即効でここから逃げますけどね。

ついでに木原くんは埋めてやる。

さてさて、これで木原くんはどう動くかな、

「おい、一発撃つておけ」

ダーン！ と画面越しから発砲音が聞こえた。

『「うつー？ んんんー？ー？」』

「嘘……でしょ……？」

肩を撃たれて衣服に赤い染みを作った白木さんが地面の上で身悶えしている光景がモニター画面に映し出されていた。

猿轡で口を塞がれているせいで満足に悲鳴すら上げられないのだろつ。

あんまりにもな光景に一瞬、頭が真っ白になつた。その後木原を地面に埋めたくなる衝動に駆られたが、なんとか踏みとどまる。いかん、ここでキレたら白木さん達の命は無い。

よし、深呼吸しよう深呼吸。落ち着こう……落ち着け私。

「テメエさあ。あんまり大人をおちよくるんじやねえぞ口。テメエみたいなモルモットが俺と対等に交渉出来るなんぞ考えてんじやあねエぞ。……あー、ムカついたわマジで」

「貴方、下手したら今の行為で自分が終わってたかもって分かってる？ 白木さん達を人質にしてるつもりなら丁重に扱いなさい。」

「丁重お？ ギヤハハツ！！ 人質は一匹いるんだぜえ？ 何なら今から一匹殺しても俺は構わないんだぜえ！！」

「うわ……これもうサイコパスとかの域だわ。  
それにしても良心の欠片もないとは。心の根から悪党だなコイツ。  
いや、木原らしいつちや木原らしいんだけどね。」

「早く元の位置に戻つてくれないかなあ！？ よし、じゃあ今から  
十秒カウントダウンをしてやる。十秒過ぎたらガキを一匹ぶち殺す。  
はい、いーちい！」

「くそおおおッ！！ 三澤潰して、一つ問題を解決したと思つたら  
更に困難な問題が表れやがつた。」

「あああ！ もう木原に従うしかないのか！？」

「にーい！ さあーん！ 四、五、ろくう！」  
「わ、分かつたわ。今すぐ……」  
『ぐああああつ！？』

「えつ？ 今なんか男の悲鳴が聞こえなかつたか。  
あれ、何か獵犬部隊の人達倒れてるんだけど。んん？ 何か二人  
組が乱入してきたぞ！？」

『おい、大丈夫か白木！ 神木！』  
『撃たれてる。……早く外へ運ぼう』  
『頼んだぞ。俺はもう一人を助けに行く』

『霧ヶ峰……それに、上条さん！？』

「くそつたのが！！」

木原の怒号が聞こえ、いつの間にか白い煙が発生していた。木原の姿はそれによって覆い隠されてしまった。

ちつ。懐中電灯無しで視界まで潰されて能力を使うのは少し酷いか。

残念だなあ木原くんを埋めてマジ太くんにしたかったのに。この煙が有毒ガスだつたりしたらヤバいし、とりあえずこの部屋から座標移動で一旦退避！

とりあえず、あの部屋に充満している煙が見えなくなったら再び突入しよう。

視界が悪い場所から木原に攻撃されたら結構マズイしね。仮に毒ガスが残ってたとしても上着脱いで鼻と口塞いえば大丈夫でしょう多分。

再突入したらコンソールを操作してあのモニターに映つてた場所がどこかを調べよう。

待つてよ白木さん達、今すぐ助けに行くから。

霧ヶ峰と上条は第十九学区にいくつか点在する廃工場の中に潜入していた。

廃工場といつても外観だけで、中身は多くの最新設備が設置されている、木原が率いる獵犬部隊のアジトの一つだが。

霧ヶ峰が結標達の危機に気付けたのは、たまたま白木と神木の二人が白いフードの男と、その部下と思われる武装した集団に連れ去られようとしていたのを目撃したからである。

すぐに助けに入った霧ヶ峰だったが、白いフードの男が予想外に

強く、一旦退避せざるを得なかつた。

それでも諦めずに追跡したおかげでここまで辿り着けたわけだが。

「分かつた。この一人を外に連れていつて救急車を呼んだ後、また戻る」

「任せたぞ上条。というか、すまないな。見ず知らずの俺に協力させちまつて」

「いいて。進んで声をお前にかけたの俺だし」

白木を背負い、なんとか立つてゐるが足がおぼつかない神木に上条が声をかける。

「歩けるか?」

「なんとか。それより白木さんを早く外に……！」

「ああ。よし、行くぞ！」

上条は自分の頬を両手で叩いて気合を入れる。

この殺風景な割には無駄に広い部屋を見付けるのに三十分くらいの時間がかかつた。退路が分かつてゐる今でも外に脱出するには十五分くらいかかるだろう。

「行かせるか」

「お、お前は」

「クソッ！ こっちにも！」

霧ヶ峰の方は白いフードの男が、上条の方は武装した猟犬部隊の数人の隊員がそれぞれ進路を塞いでいた。

「どけつ！！」

「ふん」

霧ヶ峰が叫んで腕を上げた時には、既に白いフードの男の前に人間一人隠す程の大きさの水の壁が出現していた。

三億ボルトもの出力を持つ電撃が霧ヶ峰の手から放たれたが、それは水の壁によつて阻まれてしまう。

「クソッ！ どうして俺の電撃が効かないんだ！？」

「俺は純水を操る。全くとは言わないが純水は電気をほとんど通さない。諦めろ、お前達全員でかかつても我々には勝てない」

奥歯を噛み締める霧ヶ峰と、銃を向けられ後退りしそうになつている上条。

それを見て勝利を確信した獵犬部隊の面々だつたが。

「『お前達全員でかかつても我々には勝てない』ねえ。なら、私がこの人達に加勢したらどうなるのかしら？」

この場に座標移動してやつてきた結標が薄く笑つていた。

## 安定の木原くん（後書き）

外道な木原くんが大好きです！

霧ヶ峰に上条さんが協力した経緯は次回に書く予定です。と、いつてもそんなに深い内容ではないですが。

あと次回で中二編が終わると思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4531y/>

とあるもしもの座標移動《ムープポイント》

2011年12月1日14時49分発行